

「殿、それはなりません」  
～主(あるじ)を理想的な藩主とするために～

「武士道といふは、死ぬ事と見付けたり。」で有名な『葉隠』。江戸時代の武士の生き様を説くこの書には、主君の誤った行動を正すために家臣は何をなすべきかを次のように語っています。

「…諫と言ふ詞、はや私なり。諫はなきものなりと申し候。一生御意見申し上げたるを知りたる人なし。又一度も理詰にて申し上げたる事なし。潜かに御納得なされ候様に申し上げ候由…理詰にて申し上げるは、皆我が忠節立て、主君の悪名を顕はし申し候に付、大不忠なり。御請けなされざる時は、いよいよ御悪名になり、申し上げざるには劣るにて候、我ばかり忠節者と諸人に知られ申す迄に候。潜かに申し上げ、…いよいよ隠密いたし…」

(聞書巻 2-128 より)

肥前国佐賀藩士である山本常朝(つねとも)、『葉隠』は彼の言葉を田代陣基(つらもと)が記録したものであれば、主君に意見する時は理詰めではなく、あくまでも「ひそかに」行うべきだとのこと。「ひそかに」意見をすれば、主君の過ちが世に知られることがないからだそうです。

主君の悪しき行いを正すために家臣が意見言上する行為を、一般的には「諫言(かんげん)」と言います(常朝は「諫」に対しても否定的ですが)。江戸時代、主君の振る舞いが大名としてあるべき姿とかけ離れていた場合、「御家」安泰をはかるため、家臣は諫言を行い、主君の姿勢を正しました。

ところで、この諫言という行為は、常朝の言葉からもわかるように、その行為自体が存在していたことは窺えます。では「諫言」は、常朝が主張するように、「ひそかに」行われていたのでしょうか(「ひそかに」行われた行為を、常朝はどうして知り得たのかという疑問も残りますが…)。また家臣は大名に、何を諫言したのでしょうか。

そこで今回の資料展示では、徳山藩二代藩主毛利元賢の近くで仕えた福間隆廉の日記である「福間隆廉自記」(徳山毛利家文庫)をひもとき、その実態に迫ってみようと思います。

【資料1】福間隆廉自記巻1 天和2年(1682)3月2日条

先月28日と昨日、元賢の食膳に「鱈(なます)」が出されたところ、元賢はそれに手を付けないばかりか、膳の下に隠してしまいました。理由は、大根の匂いが臭かったからとのこと。それを知った福間隆廉は、やはり元賢の近くに仕える桜井隆雄を通じて、嫌いならば手を付けなければよく、隠すことは「よろしくない」と厳しく意見を言上します。

当時13歳の元賢。嫌いな鱈を膳の下に隠せば「バレない」と思ったのか、食事を残したら「怒られる」と思ったのか…。「二度としません」と素直な一面も窺えます。

【資料2】福間隆廉自記巻1 天和2年(1682)2月23日条(パネル)

【資料1】で意見を行った9日前のいきごとです。福間隆廉としては許せない元賢の「くせ」があったため、「諫言」したとあります。その際隆廉は、証人として黒川重則を同席させて諫言しています。『葉隠』の山本常朝の主張とは現実には違ったようです。

**【資料 3】福間隆廉自記巻 2 天和 2 年（1682）10 月 28 日条**

ここでは、公の席での振る舞いが注意の対象になっています。例えば「御目見え」時に頭を傾けているのは威儀がない（「姿勢は正しく！」）とか、屋敷内で歩く際、側近に手をとってもらうことは見苦しく、外部の者の目に触れる場所では「きつと」するように（「威風堂々と！」）、などなど。殿様としての威厳を保つように指導されています。

**【資料 4】福間隆廉自記巻 3 天和 3 年（1683）2 月 1 9 日条**

この日元賢に拝謁した福間隆廉。萩藩主と路次で出会った際の対応に対する見解を申し上げるにとどまらず、話が日頃の言動にも及びます。中川隆重を膝近くに召されて雑談されませぬように、軽々しい振る舞いはなさいませぬように、「物いひ」は心静かに行われますように…。

就寝前に「ブソブソ」と意見された元賢。その日はぐっすり眠れたのでしょうか？

**【資料 5】福間隆廉自記巻 4 天和 3 年（1683）9 月 6 日条**

ここでも【資料 4】で出てきた中川隆重と寝所で話をしていることが見えます。元賢に余程気に入られていたのでしょう。

しかしここで注目したいのは飯田源七。彼は大書院において元賢に、「大書院の次の間、隅の暗い所へ参れ」と命じられます。そのような席がなぜ指定されたのか？元賢が戯れてそう命じたのか…。しかし飯田はその指示に従いませんでした。

そうした飯田を元賢は叱ります。ところが飯田は恐縮するどころか、「殿はいつも座敷の隅にお入りになります。私的な場（御座間）であれば御自由ですが、公の場（御表）で座敷の隅に座ることなどありません。それ故御命令には従いませんでした」と反論！元賢は烈火のごとく怒ったそうです。

福間隆廉に限らず、この飯田のように、「間違いは間違いだ」と主君に物申す徳山藩士たち。御家のため、主君のため、いつも従順に主君の命に従うばかりが江戸時代の武士ではなかったのです。

このように、諫言はいつも「ひそかに」行われる訳ではなく、一部の人の知るところとなっています。場合によってはわざわざ「証人」を立てて行われるなど、あえて「公」にする必要があったのです。

それにしても、家臣の諫言内容は非常に細かなところまで及んでいました。「殿様稼業も楽じゃない」一端が垣間見える思いです。

なお元賢は、隆廉らの指導が功を奏したのか、立派な藩主に成長しました。

**毛利元賢**（寛文 10 年[1670]～元禄 3 年[1690]）

徳山藩 2 代藩主。父・就隆の死により、延宝 7 年[1679]、10 歳で家督相続。健康には恵まれなかったため、その才を十分に発揮することなく元禄 3 年に没。享年 21 歳。

**福間隆廉**（寛永 8 年[1631]～享保 8 年[1723]）

徳山藩家老・福間元道の五男で、慶安元年[1648]召し出されて新たに家を興す。天和元年[1681]に一代御用人・御居間都合役となって元賢に近侍。「福間茂左衛門隆廉自記」は天和 2 年[1682]～元禄 4 年[1691]までの記録で、藩によって作られた写が現存。全 19 冊。徳山毛利家文庫「福間隆廉自記」として公開。